



よつば会だより

2023年4月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

4月を迎えました。3月は多くの地域で桜も開花し、久しぶりに花見の宴会風景も復活しました。マスクの着用も個人の判断にゆだねるなど、全面的ではないもののコロナ禍からの脱出気分を感じるようになりました。その桜に先行して、プロ野球の世界大会 WBC が開催され、栗山監督が率いる日本チームは大谷翔平や吉田正尚を筆頭に大活躍。最後にはアメリカにも勝って、無敗で優勝を飾るといふ快挙を成し遂げ、日本中を歓喜の渦に巻き込みました。こうしたことの延長で、4月の温かさを楽しみ、美味しい気分が味わいたいという気分ですが、ウクライナではロシアの侵攻による戦火が相変わらず続いていて、停戦の気配は未だ見られないことが気がかりです。



～親の思いに寄り添ってくれる医師に巡り会いたい！～ 理解できないが読ませる記事に



「みんなねっと」誌2月号に、精神疾患の息子を抱えたお母さんの投稿記事が掲載されていました。記事のタイトルは「**ケアする家族の実態を知ってほしい**」となっております、次のような文章がありました。

「息子は父なきあと、働けない身で母親までなくなった後どうなるのかという不安に襲われて、20年ぶりに入院する事態に。息子は、① 大学を出ていない ② 働けない ③ 結婚できない の現実が受け入れられず、こんなことになったのは全部親のせいだと怒りの矛先を私に向けてきます。医師からは、『訴えはもったもで、この病気になった不条理は理解できる。しかし、医師にも親にもどうすることもできないね』と言われて、親だけが支える生活は、いつかは破綻するものだと思い知りました」

この文章から、二つのことに引っ掛かりを持ちました。その一つは医師に対して。医師が息子さんの状況に対して「どうすることもできないね」と、息子さんを投げ捨ててしまっているかのような発言をしていることです。どのような前後関係の中で、この医師の発言があったのかはわかりませんが、医師は自分たちの仕事は病気のところにかかわって治療をすることであって、患者の言動の一つ一つにまでかかわっていることはできないという、高いところから見下している発言だということです。患者や家族は医師に対して、話を丁寧に聞き、たとえ手立てがないとしても気持ちのこもった言葉で対応してもらいたいと願っているのです。

二つ目は「親だけが支える生活はいつか破綻するのだと思い知りました」というところです。この記事のお母さんの文章は、「いつか破綻する」ことを思い知るのも、医師に言われたことからなっています。しかし、その繋がりがよくわかりません。しかし、前後を切り離して「親だけが支える生活はいつか破綻する」という表現だけを取り上げると、ハッとする思いをこの文章は投げかけています。「だから、精神障害者のケアのかなりの部分を親に依存している精神科医療や福祉行政の在り方に、注文がつくのですよ」と言いたくなります。

他にも同様に、その文章だけを取り上げたら考えさせられる表現がありました。「**今回初めて措置入院となりましたが退院後には親は何もできないと覚悟して、自立への道を探りたい**」という文章です。そうなんです。親は何もできないのです。そう考えて子に対応していくことのほうが、あれこれ口やかましく子に干渉していくよりはいいことなのです。でも、どういうことから親が何もできないと考えたのかはわかりません。

以上、お母さんの記事を読んで何となく楽しくなって、よつば会だよりの記事にしてみました。楽しくなりながら、考えさせられました。(N.T)

3月の活動報告

21日 家族教室 (市民センターむかいしま)



4月の活動予定

16日(日) 家族教室 (市民センターむかいしま)



*「サロンよつば」は毎週 水・土にオープンしています
AM10:00～ 気軽にお越しください



～何よりも気になりながら 後回しになっていること～ 精神障害者にかかわる 8050 問題



8050問題がマスコミの話題になったのは、令和元年のことでした。よつば会だよりでも同年6月号に、「新聞記事『8050問題』を読んで」というタイトルの記事にしています。その記事の中で「8050問題」とは何かについて、次のように書いています。

「8050問題とは、中高年の引きこもりが注目をあつめ、80歳代の親と50歳代の引きこもる子の家庭になぞらえた言葉。高齢の親の年金などの収入で暮らすケースが多い。自室でほとんどの時間を過ごし、家族以外とは交流せず社会参加しない状態を示す「引きこもり」について、厚生労働省は原則的に、その状態が6ヶ月以上続くという基準を設けている。他人とかかわらずに趣味や近所への買い物などで外出していても含まれる」

このことを思い出したのは、「尾道市第5次障害者保健福祉計画・尾道市第7期障害福祉計画・尾道市第3期障害児福祉計画の策定に係るアンケート調査、ヒアリング調査の実施について」というタイトルの文書がよつば会に届き、アンケートに回答するためによつば会の会員の方の障害福祉サービス等へのニーズは何だろうかと考えているときでした。よつば会家族教室に参加されていて、生活状況がある程度わかっている10人ばかりを思い浮かべて考えていたのですが、すべての家庭が8050問題に直面しているということに思い当たりました。親子の年齢、子が引きこもりやそれに近い状況であることなどが、まさしく8050問題そのものだと思われました。親に共通する問題は、自分たちがいなくなったときに子が「一人で生活していくことができるだろうか」です。この、親なきあと問題は、親にとって最大の課題だと思われれます。家族教室などで精神障害を持つ人の家族が、困っていること不安を感じていることが話されます。作業所が続かない、気に食わないことがあると家の中で大声を上げる、家の手伝いは一切しない、親子の間の会話がほとんどないなど、際限なく語られます。しかし、当事者が自覚して親なき後の生活に備えての準備を始めるような状況が見られたら、親の不安もただちに小さくなり、安どの思いの中で夜も穏やかに眠りにつくことができるようになるでしょう。しかし、あまりに重い問題ゆえに、家族教室などでも話題にしてこなかったように思います。

平成29年に「精神障害を持つ人のための 親なきあとに備える」という本が刊行されました。発行者は、「こころの元気+」誌を発行しているところです。この本を発刊する前に、「こころの元気+」誌では、親なきあとにかかわって特集記事を何度か組んできていて、それらを一冊の本にまとめたのがこの本です。コンボの代表理事宇田川健さんが、この本の「はじめに」の欄に次のように書いています。

「私は当事者の一人として『親なきあとは今の問題』として考えておかなければいけないと思っています。また、親なきあとのことは親だけに任せることではありません。でも、今は触れたくない問題かもしれません。家族内で急に話し合うことも難しいでしょう」

私がこの本を読み進めて感じたことは、参考になる多くの事例が掲載されていて役にたつ本だとは思いました。しかし、親なきあと問題で親が最も苦慮しているのは、子に親なきあとを考えるように話しかけても、子が親の話を一向に受け止めようとせず、相変わらず気ままな毎日を送っていることでしょう。そうした子に、親なきあとを考えるように仕向ける支援が親として最も求めたいことでしょう。しかし、この本には子に先のことを考えるように仕向ける話は見つかりませんでした。しかし、どこかで精神障害者にかかわる8050問題に対して、対策を講じているのではないかと思います。その対策が親に伝われば、親が安心できると思っています」